慈眼

西大師縁起

下

教林文庫
文庫ヲ
224
2
教林藏章

文庫7
224
2

早稲田大学図書

東叡山寛永寺慈眼大師縁起巻下

寛永元年　秀忠公作もるハ先考院よ
天台乃宗家より帰し給へり。祈願つくゑ
城道よ。あらくもよ練若と。開給へとそ
江城の東北よ。叡山王城の鬼門とも
なむ給へり給へ。叡山と号しつ。
あるようどうて。東叡山と号しつ。
安倉殊よ　大樹のさうへ天下泰平とい乃
日を待よ。待むまとの将軍　家光公宗廟
とあゞめ給へ。いまゝすゞくし給へは。

四季講堂常住

祖神の御心指よまうせ。海と師と為さ
せおいて。台教をうやまひ。惣為法花一心
摂衆達於三観せる。一心三観の血脈とこ
ろひろめ。それより以よく海師の徳名
天下よあまねく。諸宗の碩徳も。ほと
をり。勝とうくあく。あい免いきり 上皇
二文 守澄 釈之 極禁の門より。東福門院やも
みしらせ。らくあくし給ふと。大しゆのれとう
らいあく。日光山の門主りけうせた
まひ。海師の御でしみと。法法しにたり

あ
あ
ものくなることりう年仏
度とおくあ僧はあまさんあるなり
り。常随のみはみは大僧正公海。僧正
見海権僧正華海法印。大僧都尭海。ホ
余さらく川

海岸面のうゝ。叡岳東坂本表舊がつゝ。山の
井の寺よ。法勝寺の四号とやゝめゝ寺つゝ
ゝう給ひまる。今号志賀院そ乃ちこのうゝ乃東
山り　東照の御社と造営し給ふ。その
ゝそばひ。梅樹よ金玉をうばりゝ。めゝ殺
ゝやう。所のゝ海もいとむゝとかゝ面
白し。後ハむゝみゝの山樣よ。志賀乃
老松を打ひゝゝ。ゝゝ紀伊の
ゝあハ。弱立なゝゝ栗ほゝ。ゝゝ。
ゝれゝゆゝ。勝多のなゝ橋ゝゝ

よみえ。東は鳴乃浦く波うちよせ。西は
しの遠山もけさやうめ。歩み毎あるに月
新と。うく面境の山をぶ。ふとるぐうう
まちうくみく。ふい松吹風の音さを。
加ふと。ぶの里らく。書とふ廉乃祢
もとさ。雲井の居代鳴くくうう。堅田
の浦より引あくの。めもくまくそ礼
ぞとくふ。めをちうく面の海はりう
あう波良のきうねみ。ぶらくみて
ぶうう。景地なり。寛永十一年

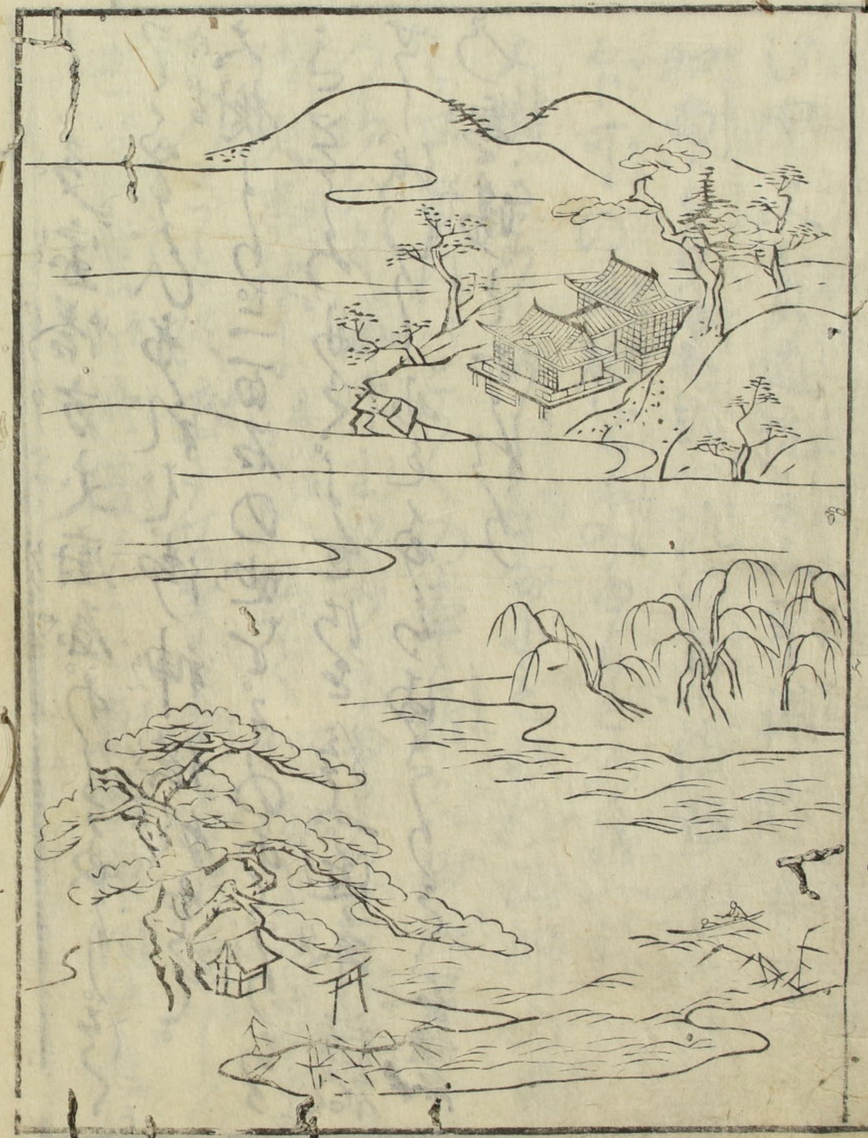
大樹の上洛より供奉の上京のつのてよ　勅許
とうう。祢祢勸請の儀式お渡ぬ
ふ。勅使宮幣とうけ宣命とふ。
ぶくして羽立日ふ潔斎とうを。
ふ山の清門自身庵よりなり。
ふ大京とのく別庵してそのしそうの巖
ぶなり　大樹家光公より二百石の地
と祢給うて。せさせ給つり。故又上野の
国新田庄世良田山長樂寺ふ台寺禪三宗
弘通の。焼郭ふく。新田徳川乃墳墓

地なりとて。頂住僧唖羊僧なりて。
雲舎雲蔵し荒廃の地となり。神
君御先祖の廟塔ありとて草の
生ずる名と姓とをとなへ住
ることもなきなれば。
住僧なりとて邪曲の事新
なる紙幸と思ひ。遠撥し給ふ。海師の
そのうち波ちの付法のように
しるりたるのみなるべし。三宗兼学の
夫なり下あり幸れるハあんと思ひ。海師よ

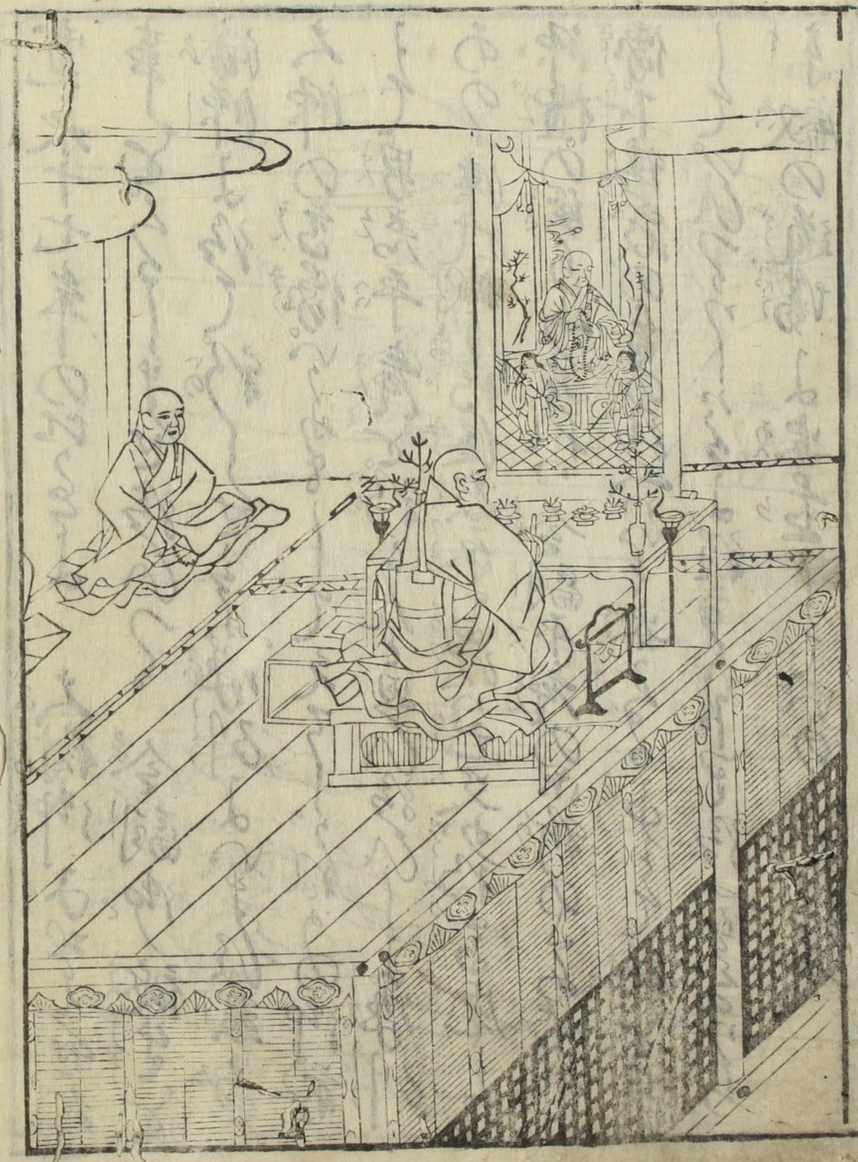
賜ひ給ふれど海のみをふそぐ
性ありそれのみなり。神君
薨ずる世給ひあまたとくして年比
家光公へ此旨ヲ給ふ。寺僧ヲ
ひして人つかひ給ふ。寺僧ヲ
楽ち。開山栄西禅師ありて。唯禅の宗な
き。海の住持なるべと。海乃給
ひなるのちハ葉上一流の付法灌頂今
より執刻しその末寺ども数多く給ふ
秘密灌頂の道場となるべ。

しや。又貧道流よ。又寧禅師流よ宣
和尚より。業翁一流の単伝密印の付
可の血脈と。文ありとの給へば。
大樹ふかくめしられ給へ。
らせ給れ。とくの事祈へ法せん
乃給へく海師よりよくあまりせ給へく。
侍従忠秋よ悪の地を紀寺法寺給へく。什物よりまた
てうこうに渡させる。雲塔破壊しを
也。法雲を法復し 東照神祠を造立

多宝塔方丈廚屋あらくあり給へく
あらひ給れ。御神供仏供して。
大樹より二百石の地を。そのあらら
ささとろめくせ給へ。近年頽破
せし紙しめをあらためらるる
乃雲湯となれり



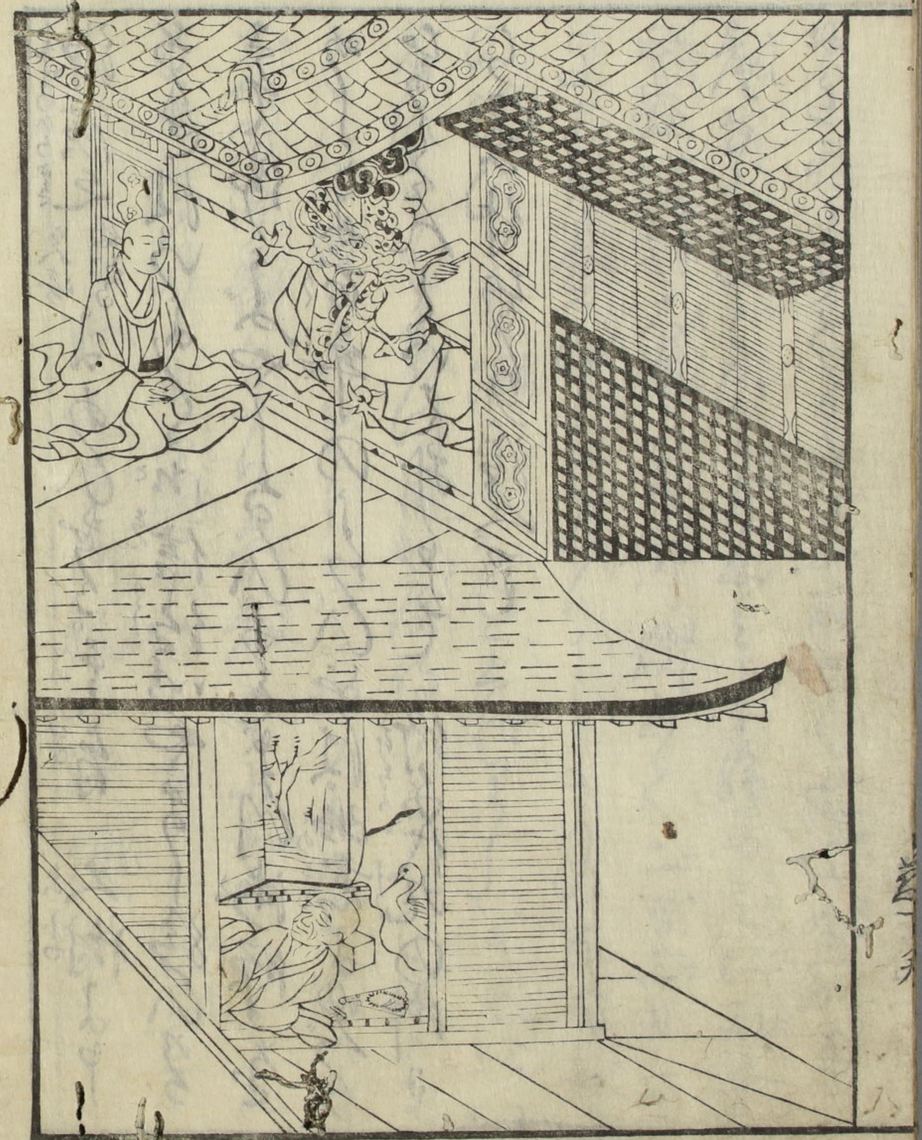
元亨十七年の比なりよ
事ともなりせ給ひつ。大樹御よりせ給
海師よりて彩せ給ひ御誕生
大師の尊像いとめもしてえてこれの御前
まして男君平竜と彩らんと思ひ給ひしよ御
あの津の城主佐藤次郎左衛門尉
師檀の祭りあられ。今副平竜のれ祈のあ
像下侍衣の自の給へいと安うるるとて
してひつつうるよ祝とは
東扇の道場よ安堂してのの世給よ



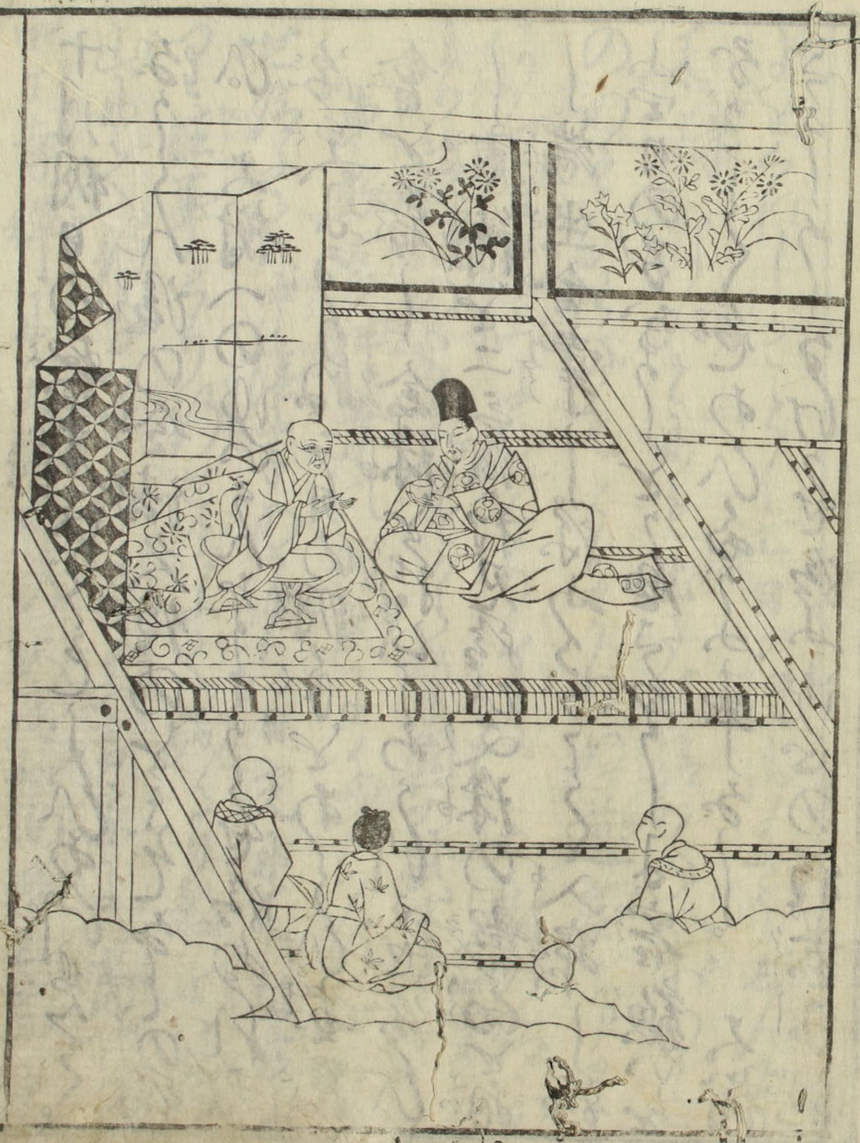
又日光山。東照宮の神ぢをひよ新宮
の祠堂めぐり。丹精をゝ尽ひよいばくよ
ものみのれ一枚。海印ぢ
つよ作りぢ。ものみとりてゝ作ひ。
出家德智恵ゝ男の経文ぢ。ものみつち
悲地ぢりと思ひ。礼拝して。神前を
まうで。ゝ八月三日の。ゝ彩の夢よ。格現
御心よげよ。ゝ世ゝ作ひ。白ゝ鶴ぢ
ゝ。ゝ月ゝ世作ぐ。海幸法来し
ゝ世ぢとゝ。ものみりゝ。蓋ぢ。海

はさまあらそうこと[illegible]ぶ所なく。願て今副平
義家ひとびとひとりをこし給ふ。[illegible]
四盛（中根氏寺家本）大樹より御使めく。二日三日さ
らさらに登山してありしよりの方（御使）
の祝ひとして酒さうみとれもてまつる。四盛山
えびをうつ。まつ月出度侍りとて何とて
くはの給とあるをうねやうみみえ給へ
義の御告をうけ。平義今はやめん
とうの給ひしかば。四盛ひとりみうけ下山を
はじめて御供生御祝の御使とうけ

源義之（[illegible]）御家号　大樹より
おもはせはいかにこれ信仰やまず給ひ
さて御うびやしるひあもぎ川滅師を
めしあ。百年のうちひとは出家よりぬ
なりうんといえみ中ひて
らうる付なり給へ　行ふ代九の御日



海せんひ給ふ度毎に。老臣藤忠膳酒井讃岐守
紀二盛四郎賀守源信綱松平伊豆守阿部忠秋
平侍従守同重次對馬守乃。執権の家臣を
もつぬ中根文蔵のを習乃人くと院門に
付をうせ給ひ。ふ名をもとめ給ふて
しとも殘りくうつせ給ふ。或時近臣
西盛作言をうけ乃ぜんじうくて海
作をい祖神大権現世よりのをとづくれ
ばとれ給ふ事なりて。べくんかうんやうの
よの作神ふひよ。氏作ん。ふ。ふ。



ゆしてゑのこと
ばかりとりつゝ清息あり。寛永廿年の秋の比
ちゝんと申く始のい　大樹入駕し給ふ
れ御つゝ湯茶などをすゝめ給ふて御させ
給ひ日数ゝ過ぎくるまゝ
とゞめ給へせ給ひて今ハの名残つきせぬほう
ゐませ給ひて。いまはのゝちとゝふ勝
さんとて侍従忠利どれ後世を法の上ゆへとゝめ
狩野法眼探幽とゝの絵師よ給ふ。ゑ形ゝ
御ゝ男侍あもゝ入ゝ

十月朔日の程より、ひあがりて、
みぞうん法の令法久住のときとて、その法
ひ。大樹へのゆいうんなりしかせられば、
海老よりぬ。二日の明日とあるひ。安泥
舎と看し令珠と持ぶしろうりさせ給ひ
し書籍と二三紙の程見給ひ文珠の影白と和
し。端坐合掌し給ひ入寂し給ひ
当日の月かすみとり色さうりよ。容貌いを
かがやく。色あひ生ける事なし。大樹
うせ給ふ御心の程察み親

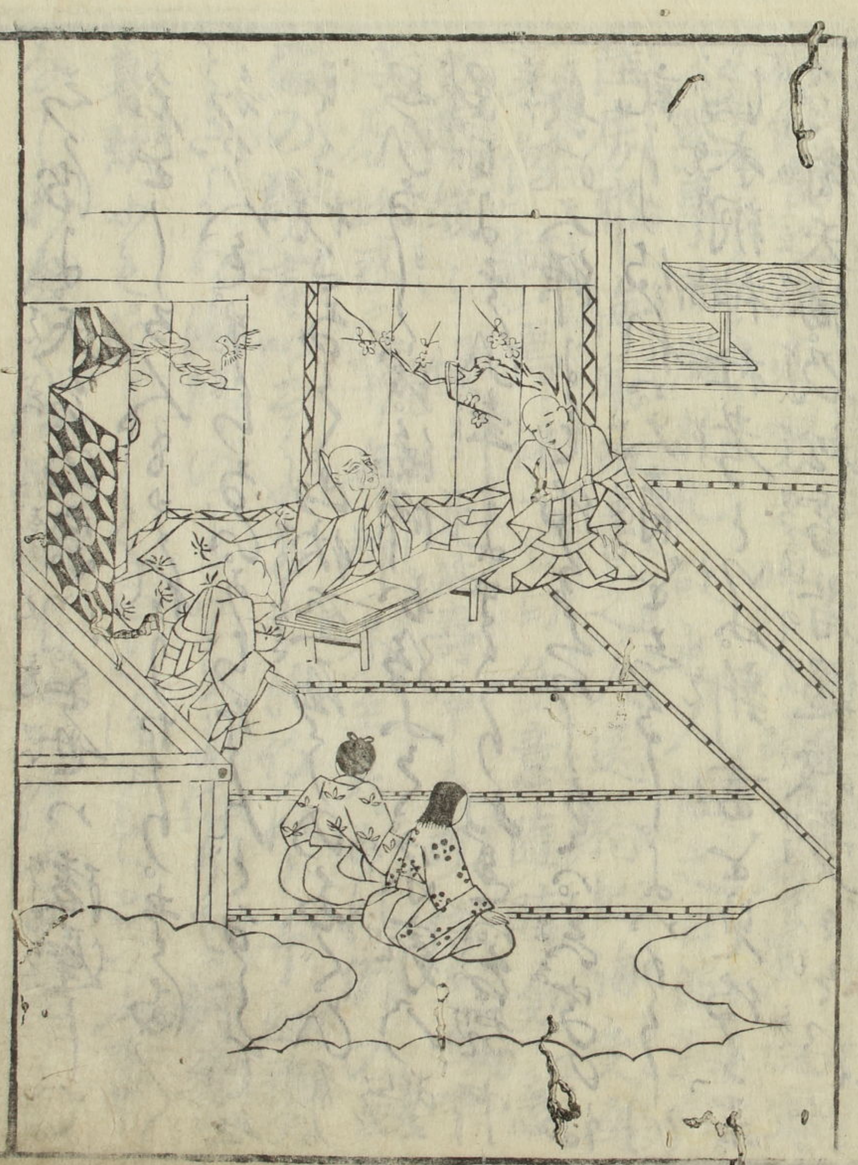
よとられしかうこと。七日ご程御ようぶんり
て。特なんとめを出させ給ひ。まつこと
のめをひらぐもとぐもとぐ。ぬ遺言りき
うせ日光山よりとうり。大樹の給ふ
ふ。検校のさ敷乃さそう敷園の武さ
東照宮神幸儀式よりかうたとく
せ給ふく。中陰すめり。日光山。
四方法事うり行せ給ふく。強う日数とい尚
山めく行なつ白。美言宗よい尚地の
四ケ寺。禅ぬ大徳寺の沢庵和尚。法宗よ

開山寺とゝめく。法ふの碩徳の僧集来し。記録をとゝめあるゝ。しかるに法ひ記
像と月毎の二日よりあるゝ法ひ法。御
ゝゝしんあて。名香を焼ぬうなとし法ふ。日
光南山より靈堂をとゝくらせ法ふ。忌慶の
度く。廟會をまうあ法ふ。第三回忌より
南山新堂よりまゝて法ひ。御菩提勅願
よ及あり。ゝゝせるゝ。道服大師の諡号の
詔勅下し法ふよ。大樹殿りゝく法ひ法。
弟子ゝをたゝらくめし。諡号ハ勅許ハ

乃法ひ世ゝ。ゝえ思ひとゝあ法ひるゝ。
をゝくゝをゝ法ひ法ふ。人当流をゝ
きる概中七回忌あを。南寺長堂へ
法ひし。年月ゝ御神ゝ法ひ
ふを後の新會も例のゝく南
堂ゝゝゝゝゝ法ひ。殊よ延寛二年
十月二日ゝ三十三回の法忌より法ふよ例
乃公方ゝゝ新會をゝゝ。日光山靈堂へ
御代参ゝて源長定 小笠原 冊法寺 参ふ。婦紙

柳

大八郎の和平。勅をしゝ作なり。
守澄親王御只入よりの
短尺を取りきれい拾遺乃大臣作
御ハ跡を和歌時和平ゝ月卿雲客
武家の人ゝよりゝ短くとも
とけ給。短尺は日光廟堂ゝ奉納
ゝん奉納



ちなむよ。天台の宗門を世に隆遷して。
名をしる人まれなりけり。中古に
初て人を尊ぶるのみならんとなんとて。
ちなわざをなす。山伏巫女のあぐひ有。
思ひ〻〻に海師おのゝ宗家の業
問ひよそひ年よりまさりぬ。容貌中
興の大師よりそ作る。たゞ美字の僧
記り作れり。大音をもつて。よハりつゝ
濱本朝神社考しるす。新書を見作る。
海屑天海及松雪者遇殘夢〻〻好枸

杞飯食之海亦喫之。與人語曰殘夢長生
不速事而服枸杞故也。人怪之曰彼蓋帝
陸房邪。海聞而喜之。人送枸杞海受為
茶飯餌焉。海之言曰任意隨時。勿急
勿速緩慢是延壽命人或信之嗚呼
海屑妖惑之弊無所不至矣。られ僧の曲
儒の謗言。ゆゑよりて作られと。手幼稚の
ちさしい海師のうつりよ作りて。朝餐
暮炊ゆゑ。新しくことをとりて事
なしわ色く拘杞飯と始て作る

然く飲食。何の好禁もなく。人のあたふる
ままにせしが。此翁より以前に人の許
より。枸杞飯を贈りしを。食せしより。彼
翁まうでこそ。物語して。終につかへし。殘
夢長生して。常に此飯を好みたまひ。ある
日終にかや。維殘夢が云ごとく。好む所の餅
終にいとあやしく。これも此すゝめや。枸杞の葉も
氣を壯にし。五勞七傷を補ひなどして醫
書にも侍れ心氣ハ人の根源なり。其源を
補く。生涯を全くし。天命を盡さん事。

備事といふひとつし。此書ハ唐の陸亀蒙か
ハ。杞菊を食して。精神をも頤養せしといひ
て。杞菊の賦を作まり。聖賢の上にもあるて
も養生の為なりとも。されど。禮記にも。為此春酒
以介眉壽といひ。周書にハ。稱五福壽為先と
説。孔子も仁者ハ壽しとの給へハ。生をいのち
壽とするなり。聖賢のなかにも此事
にハ何事も又我なりこれハ殘夢が長生をも
宿因のなすとなすれどもけふも枸杞によ
らざれども枸杞ハ心氣を補して長生の助

縁とされ給ふ耒耜よりはじまるともいへり。元
生食物の縁よりはじまるとも。この神農
草と穢百菜と設くるゆゑ。元天の民を
生ずる有百穀而養其生有百草而治其病也
と伝れたる。天壽禍福ならんみな去乃
業曰人力のなすなり。雖人力知
ばんん只波ゞ心持なく云所。海師の本心と泰
皇漢武の長生とはさはりしよ。数ちがひ
道家の飲霞餌玉して。尸解形化をしるべ
とり。西天九十六種の外乃中めを作るなど。

我佛破し給ひ。農且めをつかなる
と破せり。さて外道の辛子論よ。神仙之書
大道之所不取。為之所不貴と記し。
劉勰滅惑論。假使形飛無際神暗
鳥飛戾天寧免為鳥と書せりとか
外道論二教論等と始。諸師の説。仏乃
とゝみせし事。淮南よ作也。佛書と関
もゝとゝもゝ。庸学といふもゝられと知
らざる事なり。況海師よりはじめやうの
老仏書もゝ博強よまりもせくゝみし

とゝ。私欲の地にたれく。貪理と曉め
さ沙門し。又彼蓋常陸房邪。海龍而
喜之と云つる。殘惑と雖陸房こゝひ
し。法海師いそゝ。長ひ給ふ爲さ。
利害の爲れ事よりも。長ひいり
のるさい。法師の性ふよりいとれい。況理よ
愈せるゝ事。なんぞ。ゝこだんや。法師の
任意隨時勿急勿速緩々慢々。の給つる
ゝと記をり。此詞ハ褒言とやいゝん。貶詞と
やいゝん。聖賢の心術ハ。寛裕温柔ゝもいひ。

或ハ君子ハ坦蕩々々といひ。無欲速ゝも法ゝ
しハ勿速勿急緩々慢々ともいひ。異事
あや作ゝ。ゝれハ褒詞ゝ。ゝ。ゝ。
思ハ。嗚呼浮屠ハ矢惑無所不至と。
此一段褒貶參雜して鮮楢ゝ。
慢々是延壽と云つる。人ゝ。
ばゝて浮屠ハ矢惑といゝ。
ゝり。道ゝ。ゝ。ゝ。
作れ。孔子春秋の業。
ハ。作ゝ。聖賢ハ。言ゝ。

[illegible]
多欲ありて。凡愚乃人よりも劣る事
[illegible]十年[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

余嘗自幼侍師之座下。而互日不相追
隨。恰如形影之相從。然故其舊勲積德
取識之者而作其傳。癸亥巳前之事
跡者。亡父宗伯所悉識之者也。仍詳誌
之。爾不朽世言先師之異行者。往々有
異于與實者。只以此記可為證而已

慈眼末弟僧正胤海記

此両　大師御縁起者東叡山雖為
祕鑑之靈書蒙御　免許奉繍梓流

布千世間者也於他所不可有類板
之旨仕　嚴命加奥書畢

延寶八年龍集庚申仲冬穀旦

江戸通本町三町目
村上嘉右衛門
同　善兵衛　刊行

3388